



● 屋根上の常磐無線アンテナ2本は配管をモールド表現とし、アンテナ本体は新規パーツを取り付け済みとしています(屋根裏側からの差し込み)。また、検電アンテナの台座は円錐台座タイプを装着、付属パーツにより角台座タイプにすることもできます。なお、信号炎管は別パーツを取り付け済みとしています。

● クハ401形は上部に水切りが無い前面貫通路、前端部が短い雨樋、そして運転台構造の違いによる乗務員ドア直後の側窓配置など、111系クハ111形とは細部が異なる前頭部を再現しています。また、灰色のスカートは新規製作のパーツを取り付けています。

● 「ON-OFFスイッチ」付きのヘッド・テールライト、前面表示部は電球色LEDで点灯し、カラープリズムによって前面表示部は白色に近い色で、テールライトは赤色で点灯します。この大型のヘッドライトはレンズカットを再現、ヘッド・テールライトのリムを別パーツ化することで、よりシャープな前面形態と塗装を実現しています。また、前面表示部は交換式として、「普通(白地)」と白無地を付属する他、貫通ドアの窓内側に貼付する運行番号シール(写真では未貼付)、連結面間用の厚型と編成端部用の薄型の2種の幌枠に、ジャンパホースとジャンパ栓、さらに前面貫通ドアの渡り板(小型または大型、写真では未取り付け)も別パーツで用意しています。



● 各車の車体は、113系と異なるドアコックふたの位置なども再現、さらにクハ401形の妻面側床下には、新規製作の粉砕式汚物処理装置パーツを取り付けています。また、カブラーは配管付き密連形TNカブラー(SP)を標準装備し、前位側台車後ろのATS車上子パーツを付属しています。なお、一部の車体標記(ATS・所属・定員)を印刷済みとし、基本セット、増結セットともに車体番号の転写シートを付属しています(写真では未貼付)。



● 交流機器各種を搭載するモハ400形は、パンタグラフ前後の高圧機器類を実感的に再現、低屋根部分が初期車(1~11)よりも低く広くなった形態を模し、ランボードは段がない真っ直ぐなタイプとしています。また、交流、直流の避雷器2種は、実車に則して403・423系以降とは異なる配置としています。さらに、TM2形主変圧器などを始めとして、交直流電車独特の床下機器類を可能な限り再現しています。



401系近郊電車基本セット(4両)



401系近郊電車増結セット(4両)

国鉄は電化延伸に伴う幹線の中距離輸送を目的に、1960(昭和35)年に交直両用の401・421系を、1962(昭和37)年に直流用の111系を相次いで誕生させました。国鉄初の高性能近郊形電車ということに加え、最初の量産型交直両用電車ともなった401・421系は、基本構造が同じながらも、使用する線区の交流周波数の違いにより、常磐線用(直流1500V/交流50Hz・20000V)が401系として、鹿児島本線、山陽本線用(直流1500V/交流60Hz・20000V)が421系として製造されました。室内をセミクロスシートとした401・421系は、奇数、偶数向きで使用可能なクハ401・421形を先頭車とし、パンタ車で主変圧器や整流器、交流関連機器を搭載するモハ400・420形、これとユニットを組む主制御器、主抵抗器を搭載するモハ401・421形で編成が組まれ、この4両が編成単位となって運用されました。401・421系は後に出力を強化した403・423系へ、さらに両交流周波数に対応した、オールマイティーな415系へと発展し、交流・直流区間をまたぐ近郊輸送に活躍しました。なお、常磐線用の交直流近郊形電車は、1985(昭和60)年開催の「つくば万博」に合わせて、1983(昭和58)年よりオリジナル塗色のローズピンクから、クリーム色に青帯の塗色へ順次改められました。トミックスでは交直流近郊形電車の嚆矢となった401・421系の内、常磐線や水戸線で運用された塗色変更後の401系をセレクト、国鉄交直流近郊形電車初のハイグレード仕様とし、車体、床下を始めとして各部を検討の上、新たに設計、製作を行いました。モデルはモーター車を含む4両基本セットと、モーター車無しの4両増結セットを揃え、いずれも先頭車は高運転台のクハ401形(23~46)としています。なお、モーター車にはM-13モーターを使用したフライホイール付き動力ユニットを搭載、各車に新集電システム、黒色車輪を使用しています。

401系

近郊電車(高運転台・新塗装)

■ 国鉄 401系近郊電車(高運転台・新塗装) 基本セット(4両)
<98582> 予価¥23,100(税込)

■ 国鉄 401系近郊電車(高運転台・新塗装) 増結セット(4両)
<98583> 予価¥17,490(税込)

11月発売予定